一帯一路の中国で学び、旅した１年間

人文学部教授　桃　崎　祐　輔

はじめに

2018年３月29日より１年間、北京の中国社会科学院考古研究所で在外研究に従事した。受け入れ窓口となってくださった朱岩石副所長とは、20年ほど前、東京国立博物館の地下室で机を並べて仕事をしたご縁があった。研究テーマは魏晋南北朝期の騎馬文化と佛教考古学である。留学しなかった人生を悔いてきた筆者にとって、無限の夢が開花した１年であった。送り出してくださった武末純一先生と同僚の諸先生方に感謝したい。

社会科学院考古研究所の日々

客座研究員として相部屋に机と椅子と本棚をいただき、研究・勉学に精を出した。考古学の学術雑誌一つとっても、以前は５紙程度を読めば事足りたが、現在は査読主要誌だけで20誌を越え、どの雑誌のどの号にも、魅力的な論考が掲載されている。研究所の図書館では PC にスキャナーを接続し、片手でスキャン、もう片手でノートに読んだ論文のメモをとる日々を過ごした。図書館の入室名簿に毎日記名していると、私の高句麗馬具の論文を読んでいた王飛峰先生が声をかけてくださり、高句麗山城の論考を下さった。

ビザ取得の険しい道程

社会科学院考古研究所は国務院の下部組織で、日本の内閣府帰属に相当するが、習近平政権による綱紀粛正で、どんな部署も優遇はない。留学ビザや就労ビザは比較的とりやすいが、中国側からの俸給がない在外研究者の長期ビザ取得は極めて困難で、２回の一時帰国と東京でのビザ取得手続きを余儀なくされた。

同時期に社会科学院で動物考古学を研究されていた菊地大樹さんには、何から何まで助けてもらった。

山東の旅

最初の旅は４月６日の山東省博興県博物館。龍華寺址出土の北斉時代の瓦は、朝鮮半島や日本の飛鳥文化の祖型を示していた。翌日、古都青州を訪れた。五胡十六時代に慕容鮮卑が建国した南燕の都、広固の故地で、青州市博物館では、2018年初に公開されたばかりの慕容鮮卑の馬具を見ることができた。本博物館の建設契機となったのは、隣接地の龍興寺址から出土した数百体の白大理石の石仏群で、中でも北斉時代の石仏群は精緻さ美しさとも比類なく、心を鷲掴みにされる。改めて百済・新羅仏や飛鳥仏の故郷がここ山東にあることを痛感した。さらに省都済南の山東省博物館で、対馬で発見された北魏・興安二年（453）仏と類似する北魏北朝仏を見ているうち、朝鮮半島や日本列島への仏像拡散の構図が突然見えてきた。

北京の住居と交通

４月25日にはやっとホームレス生活を脱し、北京地鉄１号線、市街の西郊の八宝山駅の近くにある遠洋山水の高層マンションの22階に入居した。社会科学院の在外研究の先輩である山口博之氏の住居を受け継いだ。北京は故宮を二重三重に取り巻くように地下鉄が張り巡らされている。福岡に比べ交通費は非常に安い。数十km 離れた北京空港まで地下鉄で行っても、25元（425円）で、最新式の快適な市街バスは僅か２元（34円）。日本は交通費が高すぎる。主要都市なら市内共通の地下鉄・バス共用カードを買ってチャージして動くのが合理的だ。スマホには微信（ウェイシン）と翻訳アプリを入れてチャットできることが必須だ。電子決済も田舎の露店まで普及しており、中国はスマホ無しでは何もできない社会になっていた。Google が使えないから代替アプリを使うことも必要だ。

北京大学訪問

5月29日には北京大学大学院の范佳楠さんの博士論文「新安沈船与東亜海上貿易」を公聴する。研究の着眼点が良く、日本語も韓国語も堪能な彼女にはいつも生活や研究を助けられた。師匠の斉東方老師は金属器や陶磁器の専門家でタフな登山家でもある。倪潤安老師には鮮卑や北魏の事を御教示いただいた。6月4日には李雲河君の博士論文「関中地区東漢至北周墓葬的考古学研究」を公聴。中国馬具研究の将来を担う逸材だ。考古学だけで北京大学には45人の専任教員がおり、平均授業は一人週3～4コマ、1学年5人程度の学生を受け持ち、学生には半年近い発掘実習も課せられ、教育・研究を支援する体制は桁外れだ。社会科学院考古研究所や各大学では、採用後の試用期間5～6年の間に、発掘業務の傍ら毎年査読制雑誌に2本程度論文を投稿するノルマがあり、クリアできなければ採用が解消される厳しくも合理的なシステムがとられている。システムばかりが煩瑣化し学生も教員も疲弊し、肝心な専門教育が年々空洞化する日本は、全く太刀打ちできそうにない。

長春・吉林大学の訪問と東北地方の旅

4月15日から22日まで、東北地方を廻った。遼寧省都瀋陽では、瀋陽故宮の優美な宮殿や、新遼寧省学物館の三燕・高句麗馬具を夢中で観察する。吉林省都の長春は、満州国時代の帝都として戦前の重厚なコンクリート建物が多く残り、独特の重苦しさがあるが、意外や市民はこの風情を愛している。吉林省博物館は巨大な館内に扶余・高句麗文物が無造作に展示されている。22日には吉林大学を訪問。母校の筑波大を彷彿とさせるキャンパスの明るい人工林の中に、忽然と巨大な辺境考古中心の建物が現れる。考古学・人類学だけで40人の教官を擁する考古学科は最近考古学部に改組された。所長の朱泓先生は古代人骨の復顔研究の権威であり、受け入れ窓口をお願いした王培新先生は高句麗・渤海の専門家である。

7月17日、梅雨が始まった北京を出て、河北・遼寧・吉林・内蒙古を8月19日まで巡った。河北省の唐山市博物館を出て豪雨と洪水に見舞われた。万里長城の東端を守る山海関には城郭の東辺に「天下第一関」の巨大な城門がある。長城の尖端は老龍頭で海に突き出している。

本来冷房のいらない長春の夏も、今年ばかりは猛暑だった。吉林省博物館・吉林市博物館を見てのち、集安市へ移動。集安市博物館では念願の高句麗太王陵の出土品を観察。しかし北朝鮮国境のこの町は警備が厳しく、博物館に日参する外人の私は怪しまれ、最期はつまみ出された。好太王碑文・太王陵・将軍塚を見学ののち、バスで遼寧省桓仁に入り絶壁をなす五女山城に登る。遼陽博物館は、古代の遼東城ゆかりの文物が並び、日中交渉の要衝として注目だ。朝陽市博物館や北票博物館の三燕・北魏仏教文物見学は穴が開くほど見た。集安も遼陽も軒並み40度近い地獄の酷暑だったが、朝陽からバスで内蒙古の敖漢旗博物館、赤峰博物館を経て8月11日に巴林左旗の遼太祖陵へ。高台に登ると、一面の緑で、涼風が吹き抜けこの夏の中国唯一の快適な場所だった。陵碑は、粉々に砕かれていた。契丹が滅びた時、金の軍隊が太祖陵を徹底的に破壊したのだ。翌12日には

山海關

老龍頭

巴林右旗博物館を訪ねる。王麗麗さんの日本語ガイドで、白塔の納入品や、清朝蒙古貴族の文物を堪能できた。８月15日の終戦記念日は、日本人と気づかれぬよう注意してバスで遼源市へ。遼源博物館のある丘全体が高句麗の山城址だった。

成都・四川大学と南京・南京大学での学会参加

10月19日より四川省成都の日中考古学論談に出掛ける。「前１千紀的草原地帯東部和初期鉄器」、「漢代画像石棺」、「漢画丁蘭図像与佛教傳入期彫像」、「圏養的馬与放牧的馬」、「殷墟出土動物犠牲」などの発表を興味深く聴講した。24日のエクスカーションでは三星堆遺跡や金沙遺跡をめぐり、25日には四川動物園でパンダとカワキンシコウをみた。成都は食事もおいしく、気候も人もおだやかだ。

南京は呉・東晋南朝の都建康の故地だ。温暖で美しく美味豊かな都市でとても好きになった。11月11日から南京大学での古代都城研究会では、朝８：30から夜22：30頃まで２日間、１本40分の研究発表を51本聴講し、興味は尽きなかったがへとへとになった。14日のエクスカーションで南朝建康を囲む濠の発掘現場では、膨大な古越磁や、美しい蓮華文瓦に絶句した。建康石頭城の発掘現場では蓮華文磚の城壁を見る。南朝遣使の倭人も見たのだろうか。六朝博物館も真新しく美しい。15日には南京博物院を見学した。地下階には、中華民国の首都だった当時の街並みが再現されている。18日には揚州博物館を見学。漆器展やガラス玉衣が興味深かった。19日には鑑真ゆかりの大明寺へ。この寺の西に煬帝墓があり、東方の唐城址は煬帝の江都宮の跡だ。この踏査成果を早速白石太一郎先生への献呈論集に書かせてもらった。

山根直生先生と河北探訪

東洋史の山根直生先生が調査のため訪中され、鈴木昭吾先生と共に同道する。11月24日に河北省開元寺塔を見てのち、定州市博物館を見学。定州静志寺の地宮遺物のうち、隋の大業二年（606）納入遺物には、法隆寺献納宝物と同工の銅鋺や柄香炉もある。25日には定州窯をみる。日中戦争中に小山冨士夫氏によって再発見され、当地の部隊にいた田中角栄氏が、日中国交回復時に周恩来首相に定州窯の現状を尋ね、調査研究が始まったという。曲陽の北岳廟には隕石落下の記録があり、凄まじい量の石碑が並んでいた。

西安と終南山の古刹探訪

５月14日からは西安に出掛け、清真寺、碑林博物館、小雁塔、西安市博物館、咸陽市博物館、玄奘ゆかりの大雁塔、空海が修行した青龍寺址などを見学。日本の奈良仏教のルーツはほとんど西安周辺にあり、宗祖たちの祖庭を見学したことは大きな収穫だった。西安市街の遥か南東の山腹にある興教寺は、玄奘三蔵の巨大な墓塔がある。帰路、浄土宗祖善導のさらに巨大な墓塔がある香積寺を見学した。

春節明けの2020年２月17日、久しぶりに西安に入り、19日にようやく西北大の冉万里老師とお会いした。同い年とは思えないエネルギッシュさだ。21・24日には西安南郊の終南山の古刹をめぐる。三論宗草堂寺では鳩摩羅什師の墓塔を参り、三階教百塔寺では唐代の石塔が奈良時代石塔と似ていることに気付かされた。浄土宗悟真寺は険しい山道の果てに在り、宋元代の石造舎利塔が数基立っていた。律宗祖庭の浄業寺も険しい山道を登った場所にあり、裏山の山頂には隋唐の高僧南山道宣の墓塔が聳えていた。

22日に隋文帝泰陵をみる。一辺 160m の巨大方墳で日本の終末期方墳のモデルと思われた。楊貴妃墓は場所柄か受付嬢はとても美人だ。26日には唐乾陵・懿徳太子墓・永泰公主墓をまわり多くの発見があった。

阿拉善旗の鐙と銀川のピラミッド

１月28日に西安を発ち涇川・固原を経て30日に寧夏回族自治区の都銀川へ。翌日、予感に導かれて雪の賀蘭山を越えて内蒙古自治区の阿拉善旗博物館へ。ここで北魏時代、世界最古とおぼしき鉄製輪鐙を見つけて驚愕する。帰路、夕暮れの中、「東方金字塔」と称される西夏王陵を歩いた。２月１日、内蒙古の鄂爾多斯（オルドス）に至る。レアアース景気が去り市街はだいぶ寂れていたが、巨大な宇宙船のような博物館で念願の龍文透彫の帯金具を観察、翌朝には氷河のように凍結した河川敷の散策を楽しんだ。２月２日に内蒙古の呼和浩特（フフホト）で銅製鐙を見て北京に戻り、２月４日の春節前後は北京で小休止した。

雲崗・敦煌・龍門石窟と涼州仏跡の旅

雲崗・敦煌・竜門の三大石窟を見ることも重大目標だった。８月22日より平城の故地である山西省大同で開かれた北魏の研究会に参加して23・25日に２日間かけて極彩色と精緻の極致というべき雲崗石窟を見学した。２月22日には陝西省天水で須弥山のような麦石山石窟に登り、２月27日長城西端の嘉峪関を訪れ、これで東端の山海関とあわせ両端を見届けることができた。３月１日の敦煌石窟見学の歓喜は筆舌に尽くしがたく、鳴沙山で乗ったフタコブラクダも暖かくフカフカだった。地から湧き出た塩が結晶をなす玉門関は、一帯一路の整備で辺境の風情は薄れていた。３月４日、甘粛省の蘭州では奇石が仙境のように聳える炳霊寺石窟を訪れ、最高所に位置する五胡十六時代（420年）の169窟に登り心底感動した。帰国直前の３月23日、最後に洛陽市南郊の竜門石窟を訪れた。則天武后がモデルとされる（実際は年代があわない）美麗な毘盧遮那仏を見届けて中国70都市の旅を終えた。

ユーラシア横断

19世紀から20世紀前半には、欧米列強や日本が帝国主義的な侵略を行い、その一端を担う形で考古学が進められた。敦煌文書や楼蘭出土品など、陸のシルクロードでのヘディン・ペリオ・スタインらの収集品は、ヨーロッパの博物館に収蔵されている。これらの資料を見る機会はこの在外研究中しかないという思いから、スウェーデン・ノルウェー・フランス・ドイツの博物館をめぐった。

なかでも重要だったのは、ストックホルムで見た、初期バイキング期のヘルゲ島遺跡から出土した７世紀のカシミール仏、西晋代の楼蘭文書、フランス・ギメ東洋博物館のアフガニスタン資料、敦煌将来の木彫佛などである。スウェーデン王立墓所聖堂では、30年戦争の英雄グスタフ・アドルフや、軍神カール十二世の巨大な石棺、ヴァーサ号博物館では当時の巨大軍船を見ることができた。オスロでは、バイキング博物館やアムンゼンのフラム号博物館、ヘイエルダールのコンチキ号博物館に感動した。またドイツでは、ケルン大聖堂の傍らにあるローマ・ゲルマン博物館で、1000点近いローマングラスを見て驚嘆・絶句した。これらライン河流域で生産されたローカルなローマングラスと似たものは、遼寧省の北燕馮素弗墓で出土しており、今までほとんど意識していなかった欧州と極東を結ぶ草原の道と、そこに介在した柔然やエフタル、ソグド人の活動に思いをはせた。ヨーロッパの帰路に、急遽ラトビアを経由することになり、リガの美しい街並みに感動する一方、国立博物館の初期中世の馬具が西夏～元時代の馬具と似ているのに驚かされた。モンゴル帝国の波動とユーラシアの軍事技術伝播の一端をうかがうことができた。

ウズベキスタンでは、タシケント博物館でクシャーナ朝の仏教遺物を見学したあと豪華列車アフラシャブ号に乗って古都サマルカンドに向かい、27度のつもりが10度という季節外れの低温で低体温症に苦しんだ。美しい青タイルが貼られたチムール廟は後方の外壁が取り除かれているから完成当時は二回り程大きかったはずだ。内部にチムールの黒石墓標があ

雲崗20窟

甘粛省炳霊寺石窟

る。1941年６月19日、ティムール墓が調査された時、墓に「墓を暴いた者は私よりも恐ろしい侵略者を解き放つ」という言葉が刻まれており、程なくナチスドイツ軍がソ連に侵入して独ソ戦が勃発し、スターリンはティムールの呪いに恐怖したという。アフラシャブ遺跡博物館では、流暢な日本語を話す博物館の案内嬢シャリファさんと知り合いになった。ホテルは古い隊商宿そのままで、玄奘三蔵が旅した昔を思う。

中国の時代劇と TV 番組

時代劇のなかでも『霍元甲』（フォ ユェンジャア）『康熙王朝』『三国』は名作だ。『射雕英雄傳2008』はさきごろなくなった金庸という有名な武侠小説家の原作で、宋・金・蒙古の興亡と荒唐無稽な武侠家たちの戦いをみに織りなす。抗日ドラマは正直辛いが、倭寇モノなら笑って見れる。「抗倭英雄戚継光」は16世紀に倭寇を討伐した将軍のドラマで毎回悪い倭寇が出てくる。河南省鶴壁市の地方劇である豫劇の名優の金不換氏が演じる「唐知県」でも劇中に倭寇の「亀田」「小野君」「芳子」などが出てくるのが楽しい。『開封府』は北宋の名裁判官で、額に三日月の痣がある包拯（バオチェン）の活躍を描いた、いわば大岡越前だが、哀しくも美しい。また毎夜放映される「中華掲秘」では、社会科学院考古研究所や、各地の文物研究所が行った最新の遺跡の発掘ドキュメントを淡々と伝える内容に釘付けになる。

北京・南京での成果報告会

社会科学院での研究成果報告会が３月15日となり、「魏晋南北朝时期複合的騎馬文化和佛像変化的考古研究」と題して重装騎馬戦術による暴力と佛教による制御という主旨で講演した。北京大学に留学している東洋史の俊英田熊敬之青年に通訳をお願いした。中国の博物館で調査した馬具や石窟見学の成果も盛り込んだ。石窟の専門家である李裕群老師や、中央アジア騎馬文化が専門の北京大学のマリア老師が聴講くださり、本気度の高い厳しい質問や、ご叱正をいただき感激した。このあと、韓茗老師からのお招きで南京師範大学でも３月18日に同じ内容で講義した。講義は撮影されて教材配信されたそうで嬉しかった。帰路湖北省武漢の湖北省博物館や、湖南省長沙の湖南省博物館、洛陽博物館を見て北京に戻った。

おわりに――帯一路の中国に暮らして

解放後の中国は「共産主義」→「改革開放」へと変化し、それにつれて日中関係も、「日中友好」→「戦略的互恵関係」へと変化した。現在のハイテク化し、経済格差が拡大した中国は、もはや古い思想では制御しえない。習近平政権が新たに「特色ある社会主義」と「一帯一路」を示した意味はここにある。経済振興と科学技術で武装しつつ、陸海のシルクロードと伝統文化を現代に蘇らせんとする現代中国の状況はまさにルネサンスでもある。滞在も終わりに近づいた３月、習近平氏はイタリアを訪問し、23日にコンテ首相とローマで会談、イタリアは西ヨーロッパ最初の「一帯一路」構想への参加国となった。覚書の中には、ジェノバやアドリア海管理局との協定も含まれていた。英国がブレグジットで動けず、フランスとドイツが経済格差・移民問題に端を発する極右抬頭で動揺しているタイミングに、イタリアを最初のパートナーに選んだことは重要だ。すなわち欧米主導の世界秩序を否定し、漢とローマ、元とジェノバ・ヴェネチアとの交流復興による新たな世界戦略を宣言した事にほかならない。このシナリオを描いた智者が何者か興味あるところだ。「一帯一路が行き詰まった中国は、与しやすいとみてイタリアに札束攻勢をかけた」という浅薄なニュース見出しをみていると、日本は再び「東夷」に転落するのではないかと不安になる。古代史の問題はすべからく現代史であることも痛感した１年であった。

カナダ・トロント大学での在外研究

法学部教授　所　　浩　代

2018年８月より１年間、カナダ最大の都市トロントにて在外研究を行いました。初めての外国暮らしは「習うより慣れろ」という箴言そのものでした。このエッセイでその雰囲気の一部が伝わることを願います。

カナダ最大都市・トロント

カナダは、世界第２位の国土面積（１位はロシア）を有しますが、人口は約3,515万人（日本の４分の１）で、国全体のイメージは、メディアでよく取り上げられる雄大な山脈とどこまでも広がる湖面・・・といった感じそのままです。ただ私が滞在したトロントは、カナダ第１の商業都市なので、ダウンタウンは50階を優に超えるビルが立ち並び、ニューヨークとあまり変わらない感じでした。

私が滞在した2018年は、北米男子プロバスケットリーグ（NBA）に所属する「トロント・ラプターズ」がアメリカ勢を抑えて初優勝したために、どこもかしこも赤と黒のラプターズデコレーションで溢れていました。

移民大国として知られているカナダのなかでも、オンタリオ州の移民割合は突出していて、トロントの労働者の約半分は移民です。言語の壁などから移民の多くは宿泊・食品サービス産業に従事しているのですが、近時は、金融やIT業界でも多くの移民が活躍しており、カナダのシリコンバレーとも称されます。隣国アメリカが外国人労働者の流入を抑制している一方で、カナダ政府は優秀な外国人技術者の移住を促す施策を強化しているため、その影響を受けてトロントには、多くの優秀な外国人が職を探しにやってきています。そのおかげでよいアパートを確保するのが大変です。なかでも中国の若者の姿が目立っており、トロント大学の留学生国別比率をみても、全体の60％が中国からの留学生です。中国人留学生の数はトロント大学全体で１万人を超えますが、日本人は2018年度時点でたったの152人でした。

〔トロント大学正門〕

トロントで生活していると、中華系移民の存在を意識せざるを得ないのですが、同じアジア系民族としてその恩恵を受けることも多かったです。トロントには、アジア食材を多くそろえるスーパーが数多くあって、飲料コーナーやお菓子コーナーは、日本で見慣れた商品が多く並べられています。日本食材も豊富で、おでんの種、納豆、冷凍たこやき等、その気になれば日本とほぼ変わらない食卓を整えることができます。

移民が多いため、カナダの定番料理を尋ねられると困ってしまうのですが、トロントは中華街やイタリア人街の規模が大きく、レストランのクオリティは高かったです。ロブスターはトロントの名物で、バターソテーで洋風に頂くのもおいしいですが、中

華街でいただいたロブスターは絶品でした。素揚げしたロブスターが中華麺の上にドカンと載っていて、あっさりとした餡がかかっていました。ロブスターのお出しが麺にからまって、小食の私でも、かなりの量をいただきました。写真の量で2,500円ぐらいだったと思います。

〔中華街でいただいたロブスター〕

トロント大学法学部

私は、トロント大学のご厚意で「visiting professor」という肩書で、法学部（Faculty of Law, 日本の法科大学院にあたる）に所属しました。法学部は、2016年に新築された Jackman Law Building という新棟と1902年に建てられた Flavelle House という 2 つの建物で構成されています。

私は、講義室がある 4 階建ての新棟で、労働法の講義を学生に交じって受講しました。講義室の設備は福岡大学とそれほど変わりません。新棟には法学に特化した図書館が併設されていて、多くの学生が自習していました。1 階のカフェの横に大きな暖炉と吹き抜けの談話スペースがあります。建物には最新の冷暖房設備があるためとても快適で、暖炉は機能的には不要だと思いますが、－20℃を下回る日に暖炉の前で談笑する教授と学生という構図は、趣があります。

ちょっとした発見もありました。各階のトイレは、男性用と女性用の他に「All Gender」という個室があって、スタッフと学生の多様性に配慮がなされていました。

〔All gender トイレの入り口〕

毎週月曜のお昼休みには「Faculty Lunch」というランチ付きミニ研究会が開催されていて、私たち外国人研究者も参加することができました。法学部に所属する教授陣がピザやサラダをつまみながら、投稿予定の論文について意見交換する場で、これは英語の良い訓練になりました。

〔昼食付研究会が行われる Flavelle House〕

欧州出張（ILO 100周年記念シンポ）

私の在外研究をサポートしてくれたのは、トロント大学で労働法を担当する Brian Langille 教授です。彼は、国際的な学術組織のカナダ側代表を長年に渡って務めてきた労働法界の重鎮ですが、非常に気さくで温かい方でした。忙しいスケジュールの合間を縫って、私の研究活動の進捗を確認する機会を設

けてくださり、彼から多くの示唆を得ました。

2019年は、ILO が創設100周年を迎える節目の年にあたり、Langille 教授は ILO 本部の100周年記念シンポジウムのパネリストに招聘されていました。私も彼の講演を聞くべく出張を計画し、2019年 4 月に 2 週間ほど、イタリア・フィレンツェとスイス・ジュネーブに滞在し、両都市で開かれた Langille 教授のワークショップに参加しました。

イタリアのフィレンツェ大学で開催されたワークショップのテーマは、「アマルティア・センが提唱するケイパビリティ・アプローチを労働法学に取り入れるメリットについて語る！」というかなり学際的なもので、イタリア、ドイツ、イギリス等から一流の研究者が集い丁々発止の議論が英語で展開されました。また、スイス・ジュネーブで行われた ILO 100周年記念シンポジウムでも、欧州、北米、南米から集った労働法学の研究者が、英語かフランス語のどちらかで ILO の存在価値について意見を発表していました。

〔ILO 100周年記念シンポ会場の様子〕

残念ながら、両シンポともにアジア圏からの参加者は少なく、この時ほど言語の壁を高く感じたことはありません。国際的なシンポジウムでは大抵何度か、コーヒー・ブレイクが設けられており、そこで各国の研究者は旧交を温めたり、新たな研究交流を模索したりします。アジア人はただでさえ少ないので目立つことは目立つのですが、私の英語力ではなかなか自然な会話を転がしていくということができません。専門分野以外の幅広い語彙がなければ、初めてあった人と滑らかな大人の会話を楽しむのは無理というもの。外国に住んで、その土地の文化を肌で感じ、様々な文化的背景の人の暮らしを知るということは、こういうお茶時間にも活かされるのだと歯がみしました。こういうくやしさもまた、外国生活の醍醐味ですけれど。

おわりに

カナダを在外研究先に選んだのは、カナダが男女の労働者の賃金格差の縮小に向けて、先駆的な取組みをしているからでした。

日本も働き方改革の一環として法制度改革が行われていますが、この分野での日本の取組みは非常に遅れています。その一方、厳しい国際競争を勝ち抜くために、職場のダイバーシティの実現に前向きな日本企業も多く存在します。帰国後に、カナダ研究の成果の一部を一般向けに講演したところ、企業の方々から質問を多くいただきました。日本が古き雇用慣習から脱却しようとしている時期に、日本を離れる機会が得られたことを心から感謝しています。この経験を、更なる研究活動の発展につなげられるよう、精進いたします。

〔福岡県労働委員会主催のセミナーでの講演〕

【追記】

トロント滞在中にカナダの労働市場に関するエッセイを連載しました。

「フィールドアイ・トロントから①～③」
日本労働研究雑誌 706号76-77頁（2019年）
同誌　707号97-98頁（2019年）
同誌　708号116-117頁（2019年）

ボルドーでの在外研究

商学部准教授　二　宮　麻　里

2018年９月から2019年８月まで、フランス南西部のボルドーで在外研究の機会をいただきました。受入先機関は、Kedge Business School（1874年に創設された商業系グランゼコール）とボルドー大学です。わたしは酒類の流通システムの研究を専門としているため、ワイン産地のボルドーでの研究生活はまたとない素晴らしい機会となりました。

人気高まるボルドーという町

ボルドーは、パリから TGV に乗れば２時間ほど、大西洋にほど近いガロンヌ川河口の、年間を通じて気候が穏やかな街です。ガロンヌ川が三日月のようにくるっと蛇行したところに位置しているので、「月の港」（Port de la Lune）という美しい名前で呼ばれています。

ボルドーは天然の良港だったことから、ローマ帝国の属州の交易地として早くから栄え、ワインも生産されました。1152年から1452年まで、約300年間イギリス領となってからは、ボルドーワインはさかんにイギリスへ移出されるようになりました。17世紀から18世紀にかけては西インド諸島との三角貿易によってボルドーはさらに繁栄することとなりました。町にはその時代に建てられた多くの歴史的建造物が残され、2007年に世界遺産に登録されました。2015年にヨーロピアン・ベスト・デスティネーションという国際機関によって、「行くべきヨーロッパ都市」ナンバーワンに選出され、2016年には Lonely Planet により「世界でもっともトレンドな都市 NO.1」に選ばれるなど、観光地としても注目されています。

しかし、実は1980年代後半から1990年代前半にかけて、これといった基幹産業がなかったボルドーは不況で苦しんでいました。郊外に幹線道路が完成すると、大型ショッピングモールが市街地を取り囲み、中心市街地はすっかり廃れていました。1990年代前半、大学生だったわたしは何度かヨーロッパを旅行したのですが、当時の『地球の歩き方』に、「ボルドーは建物が薄汚れていてとりたてて何もないところです」というコメントがあったことを覚えています。最初に訪問したのは2010年頃だったのですが、そのときもそれほど活気がある町という印象は持ちませんでした。

1995年、アラン・ジュペ氏が市長に就任し、ボルドー市街地の再開発に着手したことが、ボルドー再興のきっかけと言われています。「町を分断するし、コストがかかりすぎる」という理由から、長年計画されていた地下鉄計画を取りやめ、2003年にトラムを走らせました。中心市街地への自動車の乗り入れを規制し、駐車場になっていた教会前広場からは自動車を追い出します。半径１キロにも満たない中心地は「歩行者天国」ないしはほとんど自動車が通らない道路となりました。それと同時に、排ガスや雨水で薄汚れていた建物の汚れを洗い流すのに補助金を支出し、街は本来の美しい姿を取り戻したのです。

ボルドーが人気の町となり、多くの観光客とともにパリやその他の地域からも移住者が増え、そのおかげで、わたしのボルドーでの住居探しは困難をきわめました。１か月間受入先になっていただいた Tatiana Boudzine-Chameeva 先生のご自宅に居候させてもらうことになってしまいました。10月に築100年を越える古いアパートになんとか居を構えることになったのですが、そこは北アフリカやイスラム圏からの移民が多く暮らす下町でした。それでも、窓からは世界遺産の教会のファサードを眺めることができます。教会前の広場では毎朝８時から日替わりで「市」が開かれ、その賑わいを楽しみながら生活するのは、商業研究者としては得難い経験でした。６月からはその広場では毎週末、なんらかのフェスが開催され、０時までのライブは大音響で、石造り

の建物全体が共鳴し、身体の中までずんずんと響くのにはほとほと参りましたが。

ガロンヌ川とボルドーの町並み

ボルドーの目抜き通り：**Rue Saint Catherine**

ボルドーでの教育・研究

Kedge Business School では講義を何度かさせてもらいました。Tatiana 先生と共同で執筆したケースをベースに、わたしの専門である日本酒流通の歴史と現状について話し、学生は新たなビジネスプランを提案する形式です。わたしにとっては初の在外研究で、英語をそれほど満足に話せるわけでもなく、3時間という長丁場に台本を用意して臨みました。学生がビジネスプランをグループで発表するのは、週末をはさんだ 3 日後というハードな日程でしたが、学生がデータ等をとりまとめて堂々と英語で発表するのには驚きました。ビジネス・スクールとはいっても、日本の大学 4 年生の年齢の学生たちもいます。Tatiana 先生は「まあ、ビジネス・スクールの学生だからね」とおっしゃっていましたが、国際化時代の到来を実感しました。

また、Kedge Business School とボルドー大学では、さまざまなセミナーや研究会が開催されます。ワイン関連の公的機関も多数あり、組織をこえて実務家、研究者、大学院生の研究交流が盛んにおこなわれていました。そうしたセミナーでも 2 回ほど報告させてもらいました。実務家も最新の研究情報を収集し、ビジネスに活かそうという人ばかりで、こうした自由な気風の中から、どんどんと新しい取組が生まれるのだろうなと思いました。

ワイナリーやワイン展示会へも出向き、調査をしました。ボルドーは、ブルゴーニュと並び称されるワインの産地ですが、生産量はその約 4 倍で、フランス全体の約 3 割から 4 割を占める大きな産地です。ボルドーワインといえば、1855年にナポレオン 3 世の要請でおこなわれた格付けワインが有名です。生産量の 5 %を占めるに過ぎない格付けワインがある地域はジロンヌ川の左岸の決まったエリアに集中しています。近年、格付けワインは、ロシアや中国、アメリカの富裕層によって買い漁られて騰貴し、1本数十万円もするようになってしまいました。

わたしは1995年に結婚したのですが、そのときに恩師からシャトー・ラフィット・ロートシルトというボルドーの三大シャトーのワインを結婚のお祝いにいただいたことがあります。その時はワインのことは全く知らず、ステーキか何かと一緒に自宅で飲んだのですが、ワインが美味しすぎて食事に負けている、という感想をもったことをうっすらと記憶に残しています。まさか、その23年後に自分がお酒の研究者になってボルドーで在外研究をしているなんて思いもよらないことでした。

シャトー・ラフィット・ロートシルト訪問

今回、ボルドー滞在中にシャトー・ラフィット・ロートシルトを見学する機会に恵まれました。シャトー・ラフィット・ロートシルトは、ボルドー大学のファンドを支援しており、外国人研究者向けの歓迎パーティではそのスポンサーになっていました。100人を超える参加者の中からくじで当たった人 4 名にランチ付きシャトー見学会をペアでプレゼントという企画がありました。わたしはそのくじには予

想通りばっちり外れたのですが、見事引き当てた日本人研究者に誘ってもらう、という奇跡がおこったというわけです。

ランチはシャトーのダイニングルームで開かれました。シャンデリアの下でイニシャル入りの銀製カトラリーが煌めくラグジュアリーな空間なのに、なんともアットホームな雰囲気で、カンパーニュ風の素朴な料理が出されました。これが本当のラグジュアリーなんだろうな、と酔いしれながら、新旧二人の醸造長にもてなしていただき、わたしの結婚のときの話も聞いてもらいました。最後に2000年という良い年のワインが出されました。調べていただければ一本いったいいくらするのかわかって驚かれるとは思いますが、わたしももう一生飲むことはないと思います。醸造長は「食事の邪魔をしないように樽の香りがそんなにつかないようにしている」と言っていました。ラフィットは樽を自社生産するほどこだわっているにも関わらず、です。まったくくせがなく、すとんとさわやかでフレッシュな味わいです。ボルドーといえば連想されるような濃い赤ワインとはまったく異なっていて、「これこそがカベルネ・ソーヴィニョンなんだ」とのことでした。わたしよりもずいぶん若い外国人研究者ばかりの会で、フランスという国の太っ腹具合に、すっかり魅了されてしまいました。

帰国しても、フランスでの数々の思い出が鮮やかに蘇ります。人から笑われてしまうと思うのですが、在外研究をはじめた時には、フランス語を勉強する気は全くなかったのですが、フランス語を話せるようになりたいと思い、ほそぼそと勉強を続ける日々です。

Il ne faut jamais baisser les bras！（決して手を下に下げてはならない。あきらめるな）

シャトー・ラフィット・ロートシルトでのランチ会
左から二人目が現在の醸造長

ベルリンでの１年を終えて

理学部教授　藤　木　　淳

2018年９月から１年間、ドイツのベルリン工科大学にて長期在外研究員として滞在することができました。まず、この機会を与えてくださった理学部の教職員の皆様方、福岡大学の関係者の皆様方にこの場をお借りして感謝します。

ベルリンはドイツ連邦共和国の北東部に位置する首都です。明治時代には岩倉使節団、伊藤博文が訪問しており、森鷗外が留学経験に基づいて著した『舞姫』の舞台でもあります（鷗外のベルリンでの最初の下宿先が森鷗外記念館です）。

第二次世界大戦後、ドイツは米、ソ、仏、英の４ヶ国によって分割占領統治され、ソ連占領地域にあったベルリンもこれら４ヶ国に分割統治されました。1949年にボンを暫定首都とするドイツ連邦共和国（西ドイツ）と（東）ベルリンを首都とするドイツ民主共和国（東ドイツ）と２つのドイツが誕生した際、ベルリンの米、仏、英による占領地域は西ベルリンとして東ドイツに浮かぶ陸の孤島となり、1961年に西ベルリンを囲むようにベルリンの壁が建設されました。ベルリンの壁は1989年11月９日に崩壊し，1990年10月３日に東ドイツ及び西ベルリンがドイツ連邦に加入することによりドイツが再統一され、ベルリンがドイツの首都になりました（10月３日はドイツの祝日）。

ベルリン工科大学はベルリン動物園の近くにあり、学生数が３万５千人（福岡大学よりも多い！）も在籍しています。私はコンピュータサイエンス学部のKlaus-Robert Müller 教授の研究室に滞在しました。

ベルリン滞在の準備の一番の難関は住まい探しでした。大学のゲストハウスが満室だったので自分で探す必要がありました。しかしベルリンは住宅不足のため探すのが大変でした。運良く入れ換わりで在外研究から帰国される方の後に入居することができました。その部屋は家具付きインターネット付きだったのが非常に幸運でした（知人はインターネットの工事に３ヶ月以上かかりました）。

その部屋はベルリンの西端にあるヴァンゼーという自然豊かな街で、部屋から見える木をリスが登るのを見たり、朝は鳥の鳴声で目覚めたりすることができました。近くには世界遺産の孔雀島（孔雀が放し飼いされている）もあります。ちなみにヴァンゼーのゼーは男性名詞のSeeで湖（女性名詞のSeeは海）のことで、ベルリンにはニコラスゼー、シュラハテンゼーなど、湖の名前を冠した地名が多くあります。

また、ヴァンゼーは自然だけでなく歴史の舞台、特に第二次世界大戦の舞台を身近に見ることができます。ヴァンゼー会議が行なわれた邸宅や東西冷戦時代に米ソのスパイ交換の場として使われたグリニッカー橋があり、グリニッカー橋の少し先にはポツダム会談が行なわれたツェツィリエンホフ宮殿があります。さらにその先にはドイツにじゃがいもを広めたフリードリヒ２世の居城であったサンスーシ宮殿があり、フリードリヒ２世の墓にはじゃがいもが供えられています。

ヴァンゼーからベルリン工科大学に向かう経路も魅力的でした。一番利用していた通勤時間の短い鉄道を利用する経路では、第二次世界大戦時に５万人以上ものユダヤ人が強制収容所に送られたグルネヴァルト駅、1943年のベルリン空襲によって破壊された姿をとどめているカイザー・ヴィルヘルム記念教会があるベルリン動物園駅を経由しました。そして、ベルリン工科大学が面している６月17日通りからはデンマークとの戦争に勝利した記念である戦勝記念塔（舞姫にも登場した後移設）が見えました。通勤時もそうですが街中を散策したときに、強制収容所に送られて亡くなったユダヤ人の名前を刻んだ「躓きの石」が歩道に埋め込まれていることに気付きます。

次に利用していたのは、孔雀島からヴァンゼー駅経由でベルリン中心部に向かう218番バスでした。このバスはグリュネバルトという大きな森の中を通るので、車窓から季節の移り変わりを肌で感じることができました。たまに1970年代のレトロな二階建てバスが来るのも魅力的でした。ただ、観光路線なので冬の平日は2時間に1本しかないのが残念でした。

数回だけですが、天気が良くて時間に余裕があるときに船で湖を横断してからバスを利用する経路も利用しました。通勤に2時間近くかかってしまうのが難点ですが、リゾート気分を味わうことができました。

滞在先に近い住まいが見つからず通勤に時間がかかることになりましたが、その分ベルリンの自然と歴史を満喫することができたので却って良かったです。

次の難関は長期滞在許可です。研究滞在の場合、事前に長期滞在許可を得ることはできず、ビザ無しでドイツに入国した後90日以内に滞在許可を得る必要があります。ここで失敗して日本に強制送還されると困るなぁと変なプレッシャーから滞在許可が得られるまでは気が休まりませんでした。

日本で準備したものはドイツ滞在中に有効な歯科治療や妊娠治療に対する補償のある健康保険の加入と、ドイツで作った銀行口座への入金手段の確保、そして帯同家族のための戸籍の準備でした。健康保険はwebで適当に見つけた代理人にお願いしました。ドイツで必要な銀行口座はドイツに到着してからN26銀行というネット銀行に口座を開設したのですが、その口座に日本から送金する手段として、送金手数料の安いTransferWiseの口座を日本で開いておきました。戸籍は若干面倒で、取得した戸籍謄本を外務省に郵送し公文書であることの証明をしてもらい、証明済みの戸籍謄本をドイツの公認翻訳士に認証翻訳をしてもらいました。あとは招聘状など細かい書類と、パスポートサイズの写真（背景色は日本の青色ではなく白色）を用意して長期滞在許可を申請します。

あとは運転免許です。滞在6ヶ月以降は日本の運転免許や日本の国際免許では有効期限内でも運転できないのでドイツの免許に書き換えました（時間がかかりました）。

これらの準備が終われば安心してベルリンで生活を送ることができます。

ベルリンは自然、歴史だけでなく芸術の街でもあります。ベルリンの国立博物館群の年間パスはお得なのでお薦めです。ベルリンの壁に絵を描いたイーストサイドギャラリーも必見です。それほど有名でなくともベルリンのあちらこちらに落書きされているベルリンの壁を見ることができます。

音楽も盛んです。ベルリンフィルハーモニーのランチコンサートなどの無料のコンサートも多く開かれていますし、有料のコンサートも手軽に楽しめます。ベルリンフィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者就任演奏会（ベートーベンの第九でした）の当日立見席が20ユーロで聴くことができました。他にもベルリンには3つの歌劇場があり、オペラも楽しめます。

他にも、クリスマスマーケットや大晦日の花火（ドイツは年末年始以外は花火禁止）、世界最長のビアガーデンと呼ばれるベルリン国際ビールフェスティバルなども楽しみました。そしてベルリンの人々と同じように湖水浴や（ベルリンの冬は昼が短く天気も良くないので日照が恋しくなります）なども楽しみました。

食生活については流石ドイツというか、ビール、じゃがいも、ソーセージ、チーズ、ヨーグルトが非常においしく、そしてとても安く入手できました。そのこともあり冬はラクレットを頻繁に食べていました。また、秋限定のフェダーヴァイサー（ワインになる途中の酒）も安くておいしかったです。ただベルリン名物のビールのシロップ割りは好みではありませんでした。また、アジア食材と魚介類は高い割にもう一つという感じでした。

外食はそれほど安くないので、もっぱらベルリンB級グルメの1つのドネルケバブを食べ歩いていました。ベルリン工科大学近くにおいしい店があったので通っていました。

この一年、非常に貴重な体験をすることができました。

改めて関係者の皆様にはこの場を借りて感謝を申し上げます。

チェコ共和国パルドビッツェ大学での在外研究について

工学部准教授　加　藤　勝　美

はじめに

福岡大学在外研究制度を活用して2019年２月から９月までの約７ヶ月間、チェコ共和国パルドビッツェ大学エネルギー物質研究所（正式名称：Ústav energetických materiálů, Univerzita Pardubice）に Visiting researcher として滞在する機会を頂きました。単身で渡航したため、渡航前および渡航直後は不安しかありませんでしたが、現地の先生方の温かいサポートの下、充実した時間を過ごすことができました。

本稿では、報告書というよりは、些か単なる旅のよもやま話になってしまいますが、チェコでの生活について書き綴ってみたいと思います。

チェコ共和国について

チェコ共和国は、欧州のほぼ中心に位置し、国土は日本の約1/5、人口は約1/12の小さな国です。公用語はチェコ語です。首都プラハから一歩郊外へ足を伸ばすと、自然の中に中世のお城や教会があちこちに点在する、まるで絵葉書の中の世界のような、とてものどかで美しい国です。一方、チェコは、中東欧地域における主要な工業国でもあります。特に自動車工業は盛んで、派手さはあまりないが堅牢な印象を受けるチェコの自動車メーカ「ショコダ」は、欧州ではかなりの人気車種となっています。

私の印象でしかありませんが、チェコの人々は、概して真面目です。そして、時間に正確です。ある日、ルーマニアでの学会に参加した帰り道、友人がオーストリアまで車で送ってくれることになりました。出発の前日、その友人がいつになく、待ち合わせ時間に絶対に遅れるなよ、と妙に念押しをしてきます。その理由を尋ねると、「チェコ人もその車に同乗するから」だそうです。このエピソードがチェコ人の国民性を象徴しているように思います。

気候は、日本と比べてかなり厳しいと感じました。厳寒の２月に着任した直後に大雪が降り、朝、吹雪の中を自転車で通勤したことが思い出されます。冬が厳しい分、チェコ人は、チェコの夏は最高だと、口を揃えてそう言います。確かに、夏は涼しく、エアコンなしでも十分に快適に過ごせる気候です。チェコと言えば、ビールが大変有名ですが、夏には皆、バーのテラスに陣取って、銘々にチェコビールを楽しむ風景が街のあちこちで見られます。また、朝と昼の気温の変動が激しいのもチェコの気候の特徴であり、朝はジャケットを来て出勤し、昼は半袖で過ごすというように、チェコでは１日の中に四季があるかのようです。

パルドビッツェ大学について

パルドビッツェは、プラハから東へ約 100km、列車に揺られること１時間ほどの場所に位置する人口

写真１　パルドビッツェのシンボル、グリーンゲート

9万人ほどの小さな町です。パルドビッツェ大学は、町のほぼ中心部にメインキャンパスを置く7つの学部からなる総合大学です。パルドビッツェは、歴史的に化学産業が盛んな街であり、このため、大学でも化学系学部が人気なのだそうです。

大学の修学年数は学部3年、修士2年、博士4年で日本とは若干異なります。また、英語のみで全ての講義が受けられるプログラムが18あるとのことで、私が居を構えた大学内の寮にも多くの外国人が入居しておりました。大学の外へ一歩出ればあまり言葉が通じず苦労したこともありましたが、少なくとも寮内では英語が共通語のように使われています。特に寮のロビーは留学生たちの賑やかな社交の場になっています。学生以外にも大学には多くの外国人職員（特にポスドク）が在籍しています。外国人職員は、隔週でざっくばらんに意見交換をするミーティングを開催しており、私も毎回参加させて頂きました。そのミーティングには、ドイツ、イタリア、スペイン、イエメン、イラン、バングラデシュ、インド、カナダ、ウクライナ、ロシア、トルコ、ベネズエラ出身の職員が参加しており、あまり日本では耳にする機会の少ない国のリアルな状況を知る良い機会になりました。

こうした国際色豊かな状況もあってか、最近、中東欧の大学と日本の大学とが学生交流の協定を結ぶケースが増えているのだそうです。実際に、私が現地に滞在して間もないころ、大分大学の先生方が大学に視察に訪れられておりました。意見交換した際には来年度から学生を派遣する計画である旨お話していました（後にも先にも、この街で日本人を見たのはこれが最後でした）。また、同じチェコ内の大学であるブルノ大学でも、丁度私が滞在中に九州大学と協定を結んだそうで、今後、学生および研究者の交流を行なうというお話でした。

写真2　焚火？と思わせるチェコ風 BBQ

エネルギー物質研究所について

私が所属していたパルドビッツェ大学エネルギー物質研究所には、学生が約10名、教員が9名、事務・技術職員が4名が所属しておりました。研究所の研究テーマは、その名の通りエネルギー物質（≒火薬）で、新しいエネルギー物質の研究開発やその安全な取り扱いに関する研究を主に行っています。キャンパスは、街のほぼ中心にあるメインキャンパスから数 km 北西にあります。凄まじい爆発音が鳴り響く実験を連日行っておりますので、人里離れたこの場所が選ばれたのでしょう。教員および学生は、エネルギー物質の物理および化学、そしてマネジメントや教育（彼らは安全工学と言っていた）の3グループに分かれて研究を実施していました。私は化学のグループに所属し、花火やロケット燃料の新しい原料として期待されているヨウ素酸塩の物性評価に関する研究を行いました。渡航前から研究所の先生方には非常に熱心にテーマ選定や研究方針に関するご指導を頂き、十分ではありませんでしたが、渡航前

写真3　研究室メンバー（主に化学グループの皆さん）

にある程度の予備実験も実施することができました。このお陰もあって、現地にて比較的スムーズに研究に取り掛かることができ、後述するような研究発表をいくつかすることができました。

研究所に所属する学生は、すべて修士課程以上の学生です。理工系の場合、ほぼ全ての学部生が修士に進み、修士課程の学生のおおよそ半数は博士課程に進学するとのことでした。ある日、修士論文審査会に参加する機会を得ましたが、研究発表20分、研究発表に対する質疑応答20分程度、化学や物理などの基礎学問に関する質疑で20分程度、さらに、質疑が不十分な場合、その場でレポートを書かせたりと、１名の学生に対して合計１時間以上をかけて審査を行います。修士課程の修業年数は２年ですが、半数近くは２年では修了できないとのことで、かなり厳格な審査である印象を受けました。なお、博士課程の修了要件は、投稿論文２報以上、国際学会での発表および１ヶ月程度の海外インターンシップを課すのだそうです。なお、今回の修士論文審査会では、受験者全員（２名ですが）が合格となり、その夜、祝賀会が開かれ大学敷地内で豪快なチェコバーベキューに舌鼓を打つことができました。

参加した学会など

チェコは、その立地から欧州内の移動には非常に便利です。滞在中は、この地の利を活かして、チェコ国内、ルーマニア、ベルギー、イタリアで開催された４つの国際会議に参加し、５件の研究発表を行うことができました。中でも印象深かった会議は、ルーマニアのティミショアラで開催されたルーマニアアカデミー主催の熱分析に関する国際会議（CATCAR28）とベルギーはブリュッセルで開催された不安定性物質爆発危険国際専門家グループ主催の会議（IGUS-EOS）です。

前者は、ルーマニア物理化学研究所の Andrei Rotaru 先生のご招待により実現しました。ブカレストでの同研究所の講演から始まり、翌日１日かけて車で隣国セルビアとの国境に近い街ティミショアラに移動して当該学会にて発表を行うというハードスケジュールでした。Plenary lecture ということもあり、少々緊張しましたが、懇親会含め当該地域の研究者との交流を深める良い機会になりました。

IGUS-EOS は、かつては経済協力開発機構（OECD）の傘下にあった会議で、そこから分離独立した会議です。いわゆる学会（Conference）ではなく、話し合い（meeting）に近い会議でした。簡単に言えば、質疑応答の時間が非常に長いと言えば理解しやすいでしょうか。これまでこのような会議には参加したことがなかった私にとっては非常に刺激的な会議でした。参加者は、主に欧州各国からであり、必ずしも参加者の多くが英語のネイティブではないのですが、各参加者の堂々とした発表および質疑の受け答えたるや、感銘すら覚えるものがありました。ノンネイティブとしての英語とはこういう風に喋るものなのかと、恥ずかしながら齢42になって今更ながら知った次第です。

写真４　パルドビッツェ大学学長室にて

写真５　ルーマニア物理化学研究所にて

おわりに

以上、私の在外研究の一端を書き綴ってみました。７ヶ月間と他の先生方の在外研究よりは短い滞在でしたが、大学内での生活はもとより、各種の学会参加など、日本では経験できない充実した時間を過ごすことができました。チェコ語が話せない私にとって、プライベートの生活では問題が沢山ありましたが、それでも、研究所長の Miloš Ferjenčík 教授、Zdeněk Jalový 先生、 Robert Matyáš 先生、そして学生の皆さまの公私にわたるサポートのもと、直面した問題や文化の違いを逆に楽しむことができたように思います。パルドビッツェ大学での研究成果を論文としてまとめることでご恩をお返ししようと考えているところです。また、本学関係部署の皆さま、講義などを代行して頂いた学科の先生方、そして家族の協力なしには、このような貴重な機会を得ることができませんでした。この場を借りて、改めて感謝の意を表したいと思います。